

4. 奈良県十津川村民俗聞き取り調査

水谷 友紀

1. 概要

奈良県十津川村では2017年度より村史編さん事業が実施されている。この編さん事業には、本学から東昇（教員）と文化情報学研究室をはじめ多数の院生、学生が歴史部会の調査に参加している。このたびは、村内の信仰・年中行事などの聞き取り調査を実施し、十津川村教育委員会の大向翔太・大杉綾花・真下卓也学芸員のご協力を得た。

2. 聞き取り調査の内容（実施日：2024年10月24日 十津川村役場）

今回は、水神^{すいじん}をまつる水神木^{すいじんぎ}信仰を中心にお話をうかがった。話者は那知合^{なちあい}の後木氏（昭和8年生）で、現在、この集落に水神木は残っていないという。その経過は、明治22年（1889）の水害後の戸数の変動（村外への転出、あるいは転入）により、大字の生活習慣は徐々に無くなっていった。そして、近年では、20年程前には存在していた水神木が、台風被害で周辺の地形もろとも崩れ、大木は倒れ、清水も止まってしまった。この時まで、近隣のかたが水神木の祭祀をされていたとのことであった。水神木とは「水神さんの木」という意味で、そのよりしろである大木をさす。つまり大木は水神の化身なのである。清水はその大木の周辺から湧き出る。この場所に木をくりぬいた「フネ」という水溜（水槽）を置き、そこへ水を汲みに行ったという。正月には若水汲みに行き、お供え物をした。一方、水神木はないが、水の取り口をまつるところもある。こちらの清水は岩場から湧き出る。今も枯れることなく、正月の若水汲みに使われ、お供えを持って行くなど、信仰は続いている。田植え前には注連縄・榊を供えたという。

今回うかがった水神木信仰について整理すると次のようになる。那知合の水神木は自然災害で失われてしまった。また、生活習慣も人口変動や簡易水道の普及などによって徐々に移り変わっていった。しかし、水（水神）に対する畏敬の念は受け継がれている。今回の話者とともにお話くださった上野地^{うえのじ}の松實氏（昭和16年生）・小原^{おはら}の下野氏（昭和29年生）、以上の3名が仰るには、谷の水を竹を割った樋^{とい}（十津川村ではトユと訛る）などで流すことを、「水をつれてくる」「水をつれに行く」と擬人化して言うのだという。水を大切に扱い、いわば、“神さんと生活をともにする”というメンタリティーのありようを示唆している。



写真1 聞き取りの様子

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第 11 号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2025 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
